

第2回北九州市文化振興計画改訂検討会 議事録
(北九州市文化振興計画に係る市長とのフリートーキング)

日時：平成27年8月28日（金）11：00～12：00

場所：北九州市役所 5階 プレゼンルーム

出席者：井生委員、今川委員、上田委員、柏木委員、古賀委員
近藤委員、椿委員、津村委員、羽田野委員、三船委員（10名）
北九州市長

事務局：大下市民文化スポーツ局長、高松文化部長、
稗田美術・舞台芸術担当課長、古林文芸担当課長、重岡メディア芸術
担当課長、福田松本清張記念館管理運営担当課長、米満文学館管理担
当課長、川副漫画ミュージアム管理運営担当課長、榎田美術館普及課
長、用田企画課長（教育委員会）、川邊広聴課長

<柏木氏>

- ・1～7のどの項目に入るか分からないが、市内の文化施設の連携ということで、一歩踏み出して200万都市圏との文化の広域連携（連合）という視点が必要。それが、北九州の文化芸術の発信につながる。
- ・芸術劇場に対する「誘客」、文化を外に発信できるし、文化のファンを増やすという視点が大切。

<上田氏>

- ・海外にどういう風に発信していくかという目線も必要。

<今川氏>

- ・芸術・文化の必要性の根本には人間が人間らしく生きることがある。人間性を失うことなく思考力や創造性を育てるには、基本になる言葉の教育が大切だと思う。実学が重視され国立大学文系学部の廃止が言われているが、教育委員会との連携を密にして、人間的なるものの原点である言葉の教育を、子どもたちにもっと細やかに丁寧にしていかなければと思う。

<三船氏>

- ・学校現場に目を当ててみると、中学校には合唱部が20校、吹奏楽部が23校、他に太鼓部、箏曲部などがあり、62校中3分の2以上が音楽に関わっている。そういう部活動は地域の敬老会などの行事にひっぱりだこで、多くの方

に喜んでもらえている。子どもたちはその情緒感を味わいながら育っている。

- ・コンクール等もあり、上位に入賞している。

- ・各地区ごとに、中文連主催の連合音楽会も行われ各校から合唱、学年合唱、学級合唱という活動も盛んに行っている。

- ・もう一つ、中文連の文化総合発表会があり、そこでは吹奏楽・リコーダー、弁論、科学の発表、テレビ番組など、質の高い発表会を行っている。そのなかで、次につなぐためにどのように進めていったらいいのか、なかなか学校の中には市の全体像を見ながらできないことが多いと限界を感じている。精一杯時間を割いてやっているが、拡げていくとなると、学校自身たいへん苦しいのではないかと感じる。

- ・先ほど課題の中にあっただ、コーディネーターという大きなところで全てを見て（成果をみて）、ピックアップして、組み立てていくようなそういう役割の人がいて、そこから発展させていくような形。そういう人が必要ではないかと感じる。

<羽田野氏>

- ・製造業にモノづくりの文化があるように文化の幅は広い。本件については、「街の元気を」というところから文化を考えてはどうか。

- ・北九州の交流人口を増やすために何かに取り組みなければならない。我々商工会議所はその一つ的手段として産業観光に取り組んでいる。

- ・この街には外国人観光客に人気のある小倉城があり、関連深い小倉祇園太鼓もあるので、これらの観光資源をインバウンド対策に活かすことにより経済効果も生まれる。

- ・平成22年当初、専門的な学芸員が充実することによって光るものがあるということで、音楽、絵画など芸術・文化面で人材育成や指導者の育成を熱心に取り組みたいと書かれていたが、これは賛同する。

- ・一番気になるのは、平成22年から26年の結果にすべて〇がついているが、できていないものはないのかということ。私のように民間企業を経験した者の感覚でいうと、5年経過し現状把握すると、削除することや新規追加することが必ずあるが、そういう整理はされているのか。

<津村氏>

- ・地域の過去の文化を継承し、未来へどう発展させていくかということ、子どもたちに提供していかなければならない。

- ・過去の文化というと、いま全国的に見ると、お城とか歴史的なところに若い

子たちがたくさん行ったり、刀剣展でも数万人の若い子達が集まったりする時代にはなっているが、ここで言っているのはそういうこととはちょっと違う。

- ・地域にある伝統文化を守ってだけでなく、子どもたちにそれをどう継承させていくかという中で、新しい芸術いわゆる現代芸術とのコラボレーションをすることによって、新しい魅力作づくりみたいなことを行い、さらにどういう風に上手くコーディネートしていくのが重要だ。そうすると、継承は比較的簡単になる。

- ・さびれて継承者のいない伝統芸能でもこれは可能である。伝統芸能を押し付けるのではなくて、新しい概念でどういう風に子どもたちに見せていくのか、提供していくのか、向き合っていくのか。10年先、20年先を見据えて取り組んでいかなければならない。

- ・文化振興計画を改訂するにあたり、文化の振興だけでなく、それを都市づくりにどう絡めていくのか。今回の計画にも是非このような文言が必要なのではないか。

<椿氏>

- ・前回、上田委員もおっしゃっていた中間層が芸術・文化への興味が薄く、参加数も非常に少ないように思うとのことだったが、同感。

- ・やがて社会人となる大学生が、今問われている中間層と言われる年代になることを考慮し、彼らならどのように地域の活性化に向けての考えがあるか意見を聞くことも重要かと思う。

- ・大学との連携・交流・協働により地域文化を振興すると7つの柱の2番目の項目に記されているが、この検討会に大学生を加えていただき若い人たちに意見を聞きたい。ここで提案されている計画に視点の違うところで考え付かないようなアイデアが提案されるかも知れないという期待。

- ・現在、シニア世代と子どもたちが同じ舞台上で歌うという市民合唱の募集をかけている。市内の少年少女合唱団、社会人合唱団を回り参加を募っているが、社会人の合唱団はほとんど高齢者による会で中間層の参加者がいないという現実を見た。またその観客は出演者に薦められるか、関係者のみとなり、一般の人が入場料払って鑑賞する聴衆は皆無に等しい。合唱公演に限らず、中間層が文化・芸術に興味に向いていない。その年代層の方々が、芸術文化を享受し参加への意欲をどう引き出すかが、今後考えていかなければならない問題でもあると思う。

- ・将来を見据え、やがて社会人となる大学生を引き込んで、彼らの意見も参考に検討を進めていくことを提案する。是非、この検討会に加わっていただきたい。

<古賀氏>

・計画の根底で気になるところがある。7つの柱は現計画の章立てと一致して作られているものなので、大きく崩したりはできないと思う。今回改訂なので、ガラッと変えてしまうことはできないだろうが、現計画を修正しながら次に向けてという契機だと思う。

・7つの柱の中に出てきている要素がまだ完全に整理できていないという印象がある。

・一番気になるのは、7つ全部重要な視点ではあるものの、これを通じてどういう都市像を実現するのかというのが見えてこない。

・文化という視点から、まちづくりをどう考えるのか、どのように都市の舵をきっていくのかというところを見せることはとても重要。

・今、目指すべきものとして、「市民が文化を身近に感じ、市民自身が文化を支えるまち」と掲げられており、確かにとても重要なことだが、都市像という意味では、ちょっと違うものも必要ではないか。

・都市像を作っていくなかで、何ができるのかというのを考える、椿委員から話があったような、若い学生たちの意見を入れるのも重要だと思う。ただ。数ヶ月で改訂作業をやらなければならないという時間の制限等もあるので、今回全部を作ってしまうというよりは、また5年後に新しい計画を作ることを見据えて、今回は準備をしてはどうか。ちょうど5年後は東京オリンピックの年にも当たっているので、オリンピック後の日本の社会がどんな風変わっていくのかというのが見えてきている時期と思う。その時期に向けて、北九州市がどんな街を目指す、それに向けて文化の視点でどんなアプローチが出来るかというのを考える5年間を、今から構想することが大切なのではないか。

・現計画の中で、それに近い部分が、文化サロンなのかなと思うが、今の計画の振り返りでは、文化サロンについて、文化のジャンルをこえて交流する会が出来ているということで実施が出来ているというような評価になっている。その部分はとても重要だが、文化振興の面だけでなく、文化の視点からまちづくりを考える場を作っていくことが必要である。文化振興というのは、例えば文化のジャンルが違う人たちが交流することで新たなものが生まれるといったようなこと、文化のまちづくりというのは観光や産業振興や社会包摂などを指す。5年後、新しい計画を作るときに向けた動きを起こしていくきっかけに、この改訂がなればなと考えている。

<井生氏>

・この計画が目指すものとして、「市民が文化を身近に感じ、市民自身が文化を

支えるまち」とあるが、「市民が文化を身近に感じる」ことが必要か。「市民自身が文化を支えるまちを目指す」とはっきり打ち出したほうがよいのではないか。

- ・12年前に北九州芸術劇場ができて、10年以上、新しい試みをしながら、市民に定着してきていると思う。劇場が出来るときに、「北九州で芝居で飯が食える街にしよう」と言った。

- ・芸術劇場は付属劇団を持つべきだ。(全国の公共劇場・音楽堂のトップ15に入っており、兵庫以西は北九州のみ。)

- ・北九州の劇団があっというのではないか。はっきり、プロを目指す。

- ・北九州市立大学に演劇科をつくる。これができたら、関西以西の生徒が集まる。その演劇科は役者を育てる場所ではなくて、批評家あるいは観察眼をもった観客を北九州で育てたらどうか。

- ・(先進地はさいたま)年長者を対象にしたゴールドシアターを北九州につくる。あるいは、子どもたちのキッズシアターをつくる。子どもというと、ミュージカルとなりがちだが、ストレートトレーを中心にした、キッズの劇団をつくる。これは、民間がやったほうがよい。この2つの劇団は目標として、2年に1回の発表会を行う。自分たちでやる。

- ・中堅層の問題は難しい。企業の文化度が問われている。働く世代が芝居を見に行きたい、コンサートに行きたい、今企業は、そんな状況ではない。製鐵、門鉄、旭硝子など大企業が文化を支えた時代があったが、今は皆でやらないといけない。社員が、年に複数回コンサートに行ったり、地域活動をしたりする会社であって欲しい。そういう感覚を持ったほうがよい。

<市長>

- ・1回目の議事録を拝見した。前回の計画は「これでいいのか」と委員の大半が思いながら、報告書が出来上がってしまった。いつの間にか作って、スタートしていた。(市長でありながら、同意見)

- ・「文化振興計画7つの柱と検討いただきたいテーマ」も、事務局でディスカッションしてまとめてきた。有力な事務方のリーダーがまとめたのではなく、皆でディスカッションしてまとめた。

- ・PDCAも踏まえて、修正・補強する際、7つの柱について「ガラガラポン」でもいいと思う。北九州市の文化が発展するためなら、今までのことは一端白紙にして、新しいものをつくりあげてもいいと私は気持ちでは思う。ただ、8年半年の仕事の中で思うのが、だいたい同じものが出てくる。議会、メディアの評価、市の職員がいろいろな団体との日々の交流を通じて、たくさんの情報が蓄積され、意見が表明される。そういうものを踏まえて、作業しているので、

これにそって何が何でもやらねばならないというわけではなくて、どんどん補強していく、変えるものは変えるという気構えである。

- ・若い世代、次の世代を大事にする、文化芸術の理解者を増やすことに対して、まったく賛成である。

- ・（法改正により）市長部局と教育委員会で、初めて、公開の場で政策を議論できるようになった。その中でシビックプライドが大事であると学校現場と私たちが一致協力して、力を入れていくことに合意ができた。学校現場で次の世代を大事に育てていくという環境は整った。

- ・高齢者で文化芸術に打ち込む人たちとは別に、大学生、中間層を手厚くする策も大切。「タダの文化」というものが、戦前から戦後についてあった。超一流の文化をタダで提供するという習慣を残した。ハンディを背負った歴史を引きずっている。お金を出して劇場に行くことは皆無ではないが、そういう一面もある。

- ・広域連携もごもっともである。北九州は広域的に下関と合わせると200万人くらいいる。200万人いれば相当のことができる。ただキッザニアについて話を聞いたところ、関東でやってみて、甲子園にやってきたが、2000万人の人口圏でないと営業はなりたたないと言われた。ひとつのすごいことをやろうとすると、1000万、2000万の人口を視野に入れないと難しいとわかった。

- ・コーディネーターについては、注目すべき議論、問題提起である。注目されるアニメ、漫画等総合的に判断できる人はなかなか難しい。

<羽田野氏>

- ・前回、一つひとつをみると全部すばらしい。何でも揃い、充実したほうがいいが、財政の問題、費用対効果の問題等がある。

- ・行政としては、総花にならざるを得ないと思うが、今後3年間で、選択と集中によりインパクトが強いものに取り組みないと5年後もまた同じことになる。

<津村氏>

- ・北九州市は、芸術文化の振興により都市づくりをしようとしている。であれば、どのように戦略的に計画を構成して、進めていくか、その方向性を重点的なことを含めてははっきりと明確に出さなければならない。今回の計画改訂にあたり、しっかりとある程度の絵を描くことが必要である。戦略性を持つことが非常に重要だ。

- ・アーツカウンシルについては、「政策評価の必要性」のみで捉えて欲しくない。文章だけ読むと誤解してしまう。アーツカウンシルは芸術文化の振興、それによるまちづくりといった、広い概念で捉えなければならない事業である。その

考え方をしっかりとベースにもって進めていくことが重要だと考えている。

- 全国的にはかつて、「北九州が最初にアーツカウンシルをつくるのではないか」と言われていた。しかし結局、「一番遅れちゃったね」と言われている。そのような中、もしこれからやるのであれば、しっかりとアーツカウンシルの考え方をおさえて、（北九州版でもかまわないので）やっていければいい。評価の概念だけで、アーツカウンシルを捉えるのは危険だ。

<井生>

- 伝統文化の継承について、北九州市には、他の都市にない小笠原庭園などあるので、伝統文化の継承は祭りに固定していないほうがよいのではないか。